

# 地域性とライフコース展望

—中学生の「職業意識」「ジェンダー意識」を手がかりにして—

工 藤 保 則・\*阿 形 健 司・\*山 根 真 理

(\*愛知教育大学教育学部)

本研究は、地域性の観点とライフコースの観点を重ね、そのふたつの交差したところで現在の中学生の姿をとらえようとしたものである。本研究と似た観点のものとしては、吉川徹の「ローカル・トラック論」がある（吉川徹 2001『学歴社会のローカル・トラック』）。それは、一地域としての地方（local）の生徒のライフコースを見ているが、本研究は都市に対しての地方（provincial）の生徒のライフコース展望を見ようとしたものである。

「地域性」「ライフコース」から中学生に接近するために、2～4節では、都市と地方の中学生を対象として実施した質問紙調査のうち、主に「職業意識」項目と「ジェンダー意識」項目の分析をおこなっている。その結果、両地域の中学生の思い描くライフコースは大きく違っていることが明らかになり、続く5節で、その違いは、都市と地方という地域性の違いによることについて、若干の議論をおこなっている。

キーワード：ライフコース、中学生、意識

## 1. はじめに

中学生は、もう子どもではないだろう。かといって、まだ、おとなともいえないだろう。子どもとおとなの間にあって位置づけのしにくい時期であり、その位置づけのしにくさは、子どもからおとなへの移行期なるがゆえともいえる。移行期による不安定なこの時期は、思春期とも呼ばれ、発達心理学的な研究対象となることも多いようである。

では、社会学的な研究対象としては、中学生はどのような存在なのだろう。それを確かめるために、日本社会学会の文献データベース（<http://jinbun1.hmt.toyama-u.ac.jp/socio/jss/> [2002年1月閲覧]）で「中学生」をキーワードとして検索をおこなってみたところ、60本の文献が提示された。ちなみに、「小学生」は7本、「高校生」は81本、「大学生」は127本であった。もちろん、この数字がすべてではないが、数の上では、中学生を対象とした研究はそれほど多いわけではなさそうである。そのうち、70年代に発表されたものは14本、80年代は25本、90年代は14本、となっており、80年代がピークともとれる状態であった。また、検索で提示された文献のうちの、調査データをもとにしたものを読んでみたところ、調査の結果の提示に終始し、時代や社会とのかかわりが希薄であったり、調査が単発なものでおわり他の調査との関連性・連続性などは考慮されないものが多いとの印象をもった。これらから、21世紀初めの社会の中での中学生の姿をとらえる調査研究は一定の意味をもってくると思われる。

社会の中でといった場合、それにはいろいろな観点があろうが、本稿では特に、地方/都市という地域性の観点から取り組むことにする。「地方的なもの」、「都市的なもの」とは、社会学における古いテーマのひとつである。と同時に、つねに新しいテーマのひとつでもある。それを手がかりとしながら、子どもでもおとなでもない存在である中学生について、実証的に考察していく。

考察においては、ライフコースという視点を手がかりにしている。それは、吉川(2001)がある地方の生徒を対象にして示したように、地域性はライフコースと深くむすびついているからである。なお、吉川(2001)は、都市に対しての地方ではなく、一地域としての地方(local)の生徒のライフコースを見ているが、それに対し本稿は、都市と対比しての地方(provincial)の生徒のライフコース展望を見ようとするものである。その際、具体的に中学生の思い描くライフコースとらえるために、本稿では、それに関わる「職業意識」、「ジェンダー意識」という意識項目についての検討をおこなっている。

## 2. 調査の概要

地域性の中で中学生を実証的にとらえるために、福井県武生市と愛知県名古屋市の中学生を対象とした質問紙調査をおこなった。その両市を選定した一番の理由は、筆者らの勤務する大学の所在地(厳密に言えば、愛知教育大学は刈谷市に位置するのであるが、刈谷市は名古屋市から電車で30分程の距離にあり、愛知教育大学にとって名古屋市は所在地にちかい関係にある)ということにある。「地元の大学」ということで、比較的、調査への協力が得られやすいと思われ、また、実際の調査対象者となる中学生の姿も想像しやすいということも理由のひとつであった。

それにくわえて、後からの理由となるが、地方と都市の中学生の比較をおこなうとする時、両市は適当な地域といえるだろう。人口規模でいえば、武生市は、福井県内では福井市につづく県内第2の市であるが、人口そのものは約7.4万人であり、地方都市というよりも地方の町といった感じがする土地である。一方、名古屋市は人口約220万人であり、愛知県で最大の市というだけでなく、日本全体でも、東京都区部、横浜市、大阪市につづく4番目の都市である。

地方と都市の比較という場合、どちらも中部地区に属するという点も利点としてはたらくだろう。日本列島の北と南、東と西、という異なる地域での比較となれば、分析・考察の際に、考慮しなければならない点も多く出てこようが、どちらも、北陸、東海という区分をこえたレベルでの地理的大区分では、同じ中部地区に属する。このことにより、分析・考察の際には、地方/都市以外の、ある程度の条件は一定になると考えられる。

最後に、調査の概要を述べたい。基本的な調査設計は2001年5月におこない、6月から9月にかけて質問項目の検討をし、仮の調査票を作成した。それを使っての予備調査を、名古屋市の中学生約23人について9月におこなった。その後、予備調査ででてきたワーディング等の不都合についての修正をほどこし、10月初旬に最終的な調査票が完成した<sup>1)</sup>。

調査対象校へは9月から10月初旬にかけて仮調査票を持参して依頼をおこなった。対象校の選定は次のようになっている。武生市には市立中学が6校あり、全数調査を念頭に6校すべてに依頼をしたが、そのうち1校からは協力を得られず、結果として5校での実査となった。名古屋市の中学については、まず愛知県教育委員会のホームページ(<http://www.pref.aichi.jp/kyoiku/> [2001年8月閲覧])にある名古屋市立中学校一覧をサンプリング台帳として、学校を単位としてランダムサンプリングをおこなった。ランダムサンプリングの際には、全130校か

ら対象者数が武生市のその数とほぼ同じになることを基準として考えた結果、6校が対象校として選ばれることになった。その6校に対して調査の依頼をおこなったが、うち1校からは協力を得られなかった。武生市、名古屋市とも、対象となった中学においては、在籍する3年生全員に対しての実施をお願いした。

調査時期は10～12月であり、調査方法は、ホームルームや授業時間内でクラス単位での集合調査である。実査当日、かぜ等により学校を欠席した生徒については、自宅で記入して提出するという配票調査にちかいかたちで実施した。その後、12月から2002年1月にかけてデータコーディング作業とデータクリーニング作業をおこない、2月初旬に有効回収票1408票（武生市620票、名古屋市788票。なお、有効回収率は武生市94.1％、名古屋市93.4％であった）が確定した。各学校別のサンプル数は表1に示している。

表1. 調査対象校のサンプル構成 (人)

		男子	女子	不明	(N)
武生市	A校	111	116	21	248
	B校	59	65	9	133
	C校	57	72	10	139
	D校	14	12	0	26
	E校	39	35	0	74
	合計	280	300	40	620
名古屋市	F校	68	58	2	128
	G校	77	88	3	168
	H校	90	77	0	167
	I校	87	77	7	171
	J校	75	74	5	154
	合計	397	374	17	788

### 3. 職業意識とライフコース展望

本節で主に扱う項目は「将来つきたい仕事」「職業観・進路観」である。

調査では、「学校を卒業したらどんなしごとをしたいですか。したいと思うしごとの内容を、わかりやすくかいてください」という質問をして自由記述で回答してもらった<sup>2)</sup>。予想されたことであるが回答の記述は多岐にわたり、質問の意図を誤解したと思われる回答も少なくない。ただし、誤解と思われる回答から、現在の中学生在がおかれている状況が垣間見られて興味深い。

表2は、この質問に対する回答を5つのカテゴリーに分類した結果を示したものである<sup>3)</sup>。これによると、全く記述がなかった（白紙回答だった）比率はそれほど大きくなく、名古屋で11.3％、武生で7.7％である（「無回答」）。回答はあったものの、「まだ決めていない」「特にない」「わからない」等、態度未決定の回答が無回答とほぼ同程度あった（「未決定」）。この2つのカテゴリーを合わせると、名古屋22.6％、武生15.1％となり、名古屋の方がつきたい仕事についてはっきりと答えられない者が多いことがわかる。一方、具体的な職業名を明らかにしていたり、記述内容から職業を推定できる回答は、名古屋では31.3％、武生では33.1％あった（「職業名」）。職業名は特定できないものの、質問に忠実に答える形で仕事の内容を形容詞などを用いて回答し

た者は、名古屋で35.3%，武生で33.5%あった（「内容記述」）。なお、「分類不能」とは、「遊びたい」「自分のやりたいことをさがす」「何もしたくない」「アルバイトでお金をためる」「高校へ行きたい」など、質問の趣旨とは異なる回答をまとめたものである。これは名古屋では10.8%，武生では18.2%であり、武生は名古屋の1.7倍である。これらの回答の記述をみると、質問文の「学校を卒業したら」という部分を、最終学校卒業後ではなく「中学校を卒業したら」という意味に解釈した者が相当数いることがうかがわれる。

「分類不能」の中でも注目されるのは、「高校へ行きたい」「部活をしたい」など、高校進学への希望を表明した者が一定数存在することである。表2には表していないが、名古屋では25人（3.2%），武生では44人（7.1%）であり、武生は名古屋の2倍以上存在する。それは、中学卒業後の進路希望において、名古屋に比べて武生ではほとんど全員とっていいほど「高校に進学する」と答えていることとも、ある意味、重なってくる。同じデータを使って分析・考察した工藤（2003）が述べているように、武生では認識としての「いま」の成績の「分化」が名古屋に比べて大きいにも関わらず、である。このことと、「つきたい仕事」をたずねる質問に対して「高校へ行きたい」という回答をした者が武生の方が多いことをつき合わせて考えると、武生の方が高校進学への圧力が相対的に強いのではないかと推測される。

表2より男女別の傾向をみると、男子より女子の方が「つきたい仕事」を具体的に想定している比率が高く、それは武生でより顕著である。反対に、「つきたい仕事」がわからなかったり、回答が全くできなかった者は女子より男子に多く、この差も名古屋より武生の方が大きい。

次に、つきたい職業名が明確な層（それぞれの地域の約3分の1にあたる）について、具体的な職業名がどのような回答分布であったか検討しよう。具体的な職業名として両地域合わせて82種類を数えた。そのうち、一人だけが挙げたものは32種類、二人が挙げたものが11種類、三人が挙げたものが7種類ある。名古屋では66種類の職業名が、武生では56種類の職業名が挙げ

表2. つきたい仕事

(%)

		職業名	内容記述	未決定	無回答	分類不能	(N)
名古屋	男子	27.7	35.3	12.8	11.8	12.3	(397)
	女子	36.4	35.0	9.6	10.4	8.6	(374)
	全体	31.3	35.3	11.3	11.3	10.8	(788)
武 生	男子	27.1	35.7	9.3	8.6	19.3	(280)
	女子	40.3	31.7	5.3	7.3	15.3	(300)
	全体	33.1	33.5	7.4	7.7	18.2	(620)

表3. 職業大分類（SSM8分類）による「つきたい職業」

(%)

		専門的 職業	管理的 職業	事務的 職業	販売的 職業	熟練的 職業	半熟練 的職業	非熟練 的職業	農林的 職業	(N)
名古屋	男子	57.3		13.6	0.9	18.2	6.4	0.9	2.7	(110)
	女子	73.5	0.7	4.4	5.1	14.0	0.7	1.5		(136)
	全体	66.4	0.4	8.5	3.2	15.8	3.2	1.2	1.2	(247)
武 生	男子	61.8		2.6	3.9	28.9	1.3		1.3	( 76)
	女子	71.1		4.1	4.1	19.0		0.8	0.8	(121)
	全体	66.8		3.4	4.4	23.4	0.5	0.5	1.0	(205)

っており、名古屋の方がやや多様性に富んでいる。

職業を分類する方法はさまざまであるが、ここで、「SSM職業大分類」(1995年SSM調査研究会 1995)に依拠して分類してみよう。表3は、地域ごとに8分類の職業カテゴリー別にみたものである。両地域に共通の特徴は、「専門的職業」が3分の2を占め、男子より女子が多いことと、「熟練的職業」が「専門的職業」について多いことである。「事務的職業」は武生よりも名古屋に多く、「熟練的職業」は名古屋よりも武生の方がやや多い。地域別に細かくみると、名古屋では、男子の方が女子より「事務的職業」が多いことと、武生では男子の方が女子より「熟練的職業」が多いことが特徴である。

表4は、つきたい職業名が明確な者のうち、それぞれの地域ごとに多いものから順に上位12種類の職業名を地域別に列挙したものである。なお、( )内の比率は、具体的な職業名を回答した者全体に対する比率を示す。名古屋ではこの12種類で全職業名のうち58.3%、武生では60.5%を占める。

表4より、両地域に共通して上位に挙がったのは、「保育士」「教員」「美容師」「スポーツ家」の4種類で、順位は異なるものの、名古屋でも武生でもこの4つで上位4位までを占めている(名古屋で33.2%、武生で35.6%)。その他に共通して多かったのは、「看護師」「自動車整備士」「イラストレーター」「大工」の4種類で、どちらの地域でも同じような職業が上位を占めていることがわかる。

では、男女の違いはどのように現れているだろうか。表4からは読みとりにくいだが、名古屋の男子で多いものから順に並べると「スポーツ家」(18.2%)、「警察官」(9.1%)、「教員」(7.3%)、「自動車整備士」(6.4%)、「大工」(5.5%)、「研究者」(4.5%)、「プログラマー」(4.5%)などとなる。名古屋の女子で多い順に並べると、「保育士」(16.9%)、「美容師」(10.3%)、「教員」(8.8%)、「看護師」(6.6%)、「イラストレーター」(4.4%)、「研究者」(3.7%)、「俳優」(3.7%)などとなる。

一方、武生の男子で多いものから順に並べると、「教員」(11.8%)、「スポーツ家」(10.5%)、「大工」(9.2%)、「自動車整備士」(6.6%)、「エンジニア」(6.6%)、「料理人」(5.3%)などとなる。武生の女子で多い順に並べると、「保育士」(17.4%)、「美容師」(15.7%)、「教員」(7.4%)、

表4. つきたい職業

(人 かつこ内は%)

	名 古 屋				武 生		
	全体	男子	女子		全体	男子	女子
保育士	24( 9.7)	1( 0.9)	23(16.9)	保育士	23(11.2)	0( 0.0)	21(17.4)
教員	21( 8.5)	8( 7.3)	12( 8.8)	美容師	22(10.7)	3( 3.9)	19(15.7)
スポーツ家	20( 8.1)	20(18.2)	0( 0.0)	教員	19( 9.3)	9(11.8)	9( 7.4)
美容師	17( 6.9)	3( 2.7)	14(10.3)	スポーツ家	9( 4.4)	8(10.5)	1( 0.8)
警察官	12( 4.9)	10( 9.1)	2( 1.5)	大工	9( 4.4)	7( 9.2)	1( 0.8)
研究者	10( 4.0)	5( 4.5)	5( 3.7)	イラストレーター	8( 3.9)	1( 1.3)	7( 5.8)
看護師	9( 3.6)	0( 0.0)	9( 6.6)	カウンセラー	6( 2.9)	0( 0.0)	6( 5.0)
自動車整備士	7( 2.8)	7( 6.4)	0( 0.0)	医師	6( 2.9)	3( 3.9)	3( 2.5)
イラストレーター	6( 2.4)	0( 0.0)	6( 4.4)	看護師	6( 2.9)	0( 0.0)	6( 5.0)
プログラマー	6( 2.4)	5( 4.5)	1( 0.7)	自動車整備士	6( 2.9)	5( 6.6)	1( 0.8)
大工	6( 2.4)	6( 5.5)	0( 0.0)	エンジニア	5( 2.4)	5( 6.6)	0( 0.0)
俳優	6( 2.4)	1( 0.9)	5( 3.7)	料理人	5( 2.4)	4( 5.3)	0( 0.0)
N	247	110	136	N	205	76	121

「イラストレーター」(5.8%)、「カウンセラー」(5.0%)、「看護師」(5.0%)などとなる。

名古屋では「教員」と「研究者」が男女に共通して現れるが、武生では「教員」のみが男女に共通である。このように、上位を占める職業についてみると、どちらの地域でも男子と女子とで重なる職業が小さい、言い換えれば男子に好まれる職業と女子に好まれる職業が異なっている。「保育士」になりたいという男子や「大工」、「自動車整備士」になりたいという女子がいる一方で、従来の「男の職業、女の職業」というジェンダー・イメージが強く残存していることがうかがえる結果である。

出現した職業名の種類についてみると、名古屋の男子は39種類、女子は46種類で、武生の男子は31種類、女子は42種類となり、どちらの地域でも男子より女子の方が多様性に富んでいる。その一方で、上位5位まで(武生女子は同率順位があるので6種類)が全体に占める比率は、名古屋男子は46.4%、名古屋女子は47.1%、武生男子は44.7%、武生女子は56.2%となる。名古屋では男女間で差がみられないが、武生では男子と異なり女子では上位5位までで職業名を答えた者の過半数を占めるほど偏りが大きい。

「SSM職業大分類」に基づいて検討すると、全体の傾向と同様に、上位にあがった職業は「専門的職業」に分類されるものが多い。表4でいえば、「保育士」「教員」「スポーツ家」「研究者」「イラストレーター」「プログラマー」「俳優」「介護福祉士」等である。次に目立つのは「熟練的職業」で、「美容師」「自動車整備士」「大工」「料理人」が相当する。これらの職業は、資格を必要として職域がはっきりしている職業や、身近に接触する機会が多い職業、カタカナで表記される現代的な職業が含まれている。日本労働研究機構(2001)は、中学生・高校生に424種類の職業名を提示して「イメージできない」「知りたい」「やってみたい」の3つの観点により「はい-いいえ」で評定を求めている。職業名がわれわれの分類と一致するものについて検討してみると、「つきたい仕事」の上位に挙げた職業の多くは、いずれも日本労働研究機構の調査では「イメージできない」比率が低い、言い換えれば職業イメージがえられやすいものであることがわかる<sup>4)</sup>。

次に「職業観・進路観」の質問群について検討していく。

轟(2001)は、5つの視点から兵庫県都市部の高校生の職業観の変化を検討している。ここではほぼ同じ質問を利用して中学生の職業観・進路観をみることにしよう。質問は、進路や職業に関する考え方について、「強くそう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思わない」「まったくそうは思わない」の5段階の選択肢から一つ選んでもらう形式で尋ねている。その結果を表したものが表5である。

まず、①「できることなら、いつまでも生徒・学生生活をつづけて、職業などはもちたくない」という「職業忌避感」についてみてみよう。「強く／どちらかといえばそう思う」は武生より名古屋に多くみられる(名古屋25.3%、武生18.0%)。とくに「強くそう思う」は5.0ポイント名古屋の方が高い。男女別の比較をすると、どちらの地域でも明らかな差はみられない。

②「遠い将来の目標のために、したいこともしないで生きるよりも、今のしたいことに忠実に生きるべきだ」という「現在欲求の優先」についてみてみよう。どちらの地域においても肯定的な回答が半数をこえており、否定的な回答が1割強ある。地域間での違いはみられず、男女別の違いも明らかではない。

③「一生の仕事になるものを、できるだけ早くみつけるべきだ」という「一生の仕事志向」についてはどうだろうか。「強く／どちらかといえばそう思う」は、名古屋より武生に多くみられ

る（名古屋58.2%，武生62.7%）。とくに「強くそう思う」は武生の方が5.5ポイント多い。男女別にみると、武生では明らかな違いはみられないが、名古屋では男子が30.5%，女子が19.9%と、女子より男子の方が「強くそう思う」と答えた者が多い。

④「ひとつの職業にとらわれるより、その時々により利便な職業についての方がよい」という「転職志向」についてみてみよう。どちらの地域も肯定的回答が2割、否定的回答が4割台半ばで、地域間に明らかな違いはみられない。男女別では、武生でははっきりしないものの、名古屋では男子が23.0%，女子が16.5%と、女子より男子の方が肯定的回答が多い。

最後に⑤「職業は、お金をかせぐだけのものとしてわりきり、職業以外の生活に自分のいきがいをみつきたい」という「手段的職業観」についてみてみよう。両地域とも肯定的回答が4割程度、中立的回答が3割、否定的回答が3割程度と回答が三分され、地域間に明らかな違いはみられない。男女別では両地域とも男子の方が女子より肯定的回答が多い傾向がうかがわれるものの、明確な違いは認められない。

以上の結果をまとめると、名古屋の方が武生より「職業忌避感」が強く、「一生の仕事志向」が弱いことがわかる。いわば名古屋の方がモラトリアム傾向が強いということである。ただし、あくまで地域間の相対的な関係であり、両地域の中学生はモラトリアム傾向が絶対的に強いわけではない。表には示していないが、「将来のことはわからないから、職業のことはかんがえたくない」や「将来、職業につかずに、好きなことをしていきたい」という項目については、肯定的回答がどちらの地域においても2割未満しかなく、多数派は否定的回答をしていることからそのように考えられる<sup>5)</sup>。

調査時期や調査方法が異なるので、轟（2001）の高校生調査の結果と直接比較することは困難であるが、「職業忌避感」と「一生の仕事志向」の肯定率は名古屋の結果が高校生の結果に近い。都市部の傾向として共通なのかもしれない。名古屋と武生の両地域の傾向が高校生調査の結果と大きく異なるのは、「現在欲求の優先」である。これは両地域で5割を超える肯定率であるが、高校生調査では4割以下の肯定率である。この項目は、高校生調査でも、肯定的意見が16年間で顕著に増加した例外的な項目であった。ただし、高校生調査では、「いまのしたいこと」ではなく「現在の欲求」に忠実に生きるべきだというワーディングを用いており、今回の中学生調査よりもやや強いニュアンスをおびているので、その点を割り引いて解釈すべきであるかもしれない。

ここまでで明らかになったことを地域別にまとめてみる。まず、両地域に共通の傾向として、つきたい仕事ははっきりしている者の中では、「専門的職業」を希望している者が3分の2を占めており、その次には「熟練的職業」が多い。具体的な職業名としては、「保育士」「教員」「美容師」「スポーツ家」の4種類が上位を占めており、中学生にイメージしやすい職業が挙げられている傾向が認められる。男子と女子とでは具体的な職業名の重なり部分が小さいことも両地域に共通の傾向である。職業観については、「現在欲求の優先」志向が過半数を占めている。だからといって職業よりも余暇を重視する「手段的職業観」が多くみられるかというとそうではなく、「手段的職業観」を肯定する者はどちらの地域も4割程度であった。

地域別の特徴をみると、まず名古屋の中学生は、つきたい仕事は明確ではない者が多いが、明確な者の中ではつきたい職業の多様性が認められる。また、職業観については、相対的に「職業忌避感」が強く、「一生の仕事志向」が弱い。

一方、武生の中学生は、名古屋と比べるとつきたい仕事は明確である者が多いが、明確な者の中ではつきたい職業の多様性が名古屋ほどはみられない。また、職業観については、相対的に

表5. 職業観・進路観

(%)

①できることなら、いつまでも生徒・学生生活をつづけて、職業などはもちたくない  
[職業忌避感]

		強くそう 思う	どちらかと いえばそう 思う	どちらとも いえない	どちらかと いえばそう 思わない	まったく そうは 思わない	N
名古屋	男子	13.2	13.4	20.5	23.8	29.1	(395)
	女子	10.2	12.7	21.3	27.0	28.8	(371)
	全体	12.3	13.0	20.6	25.4	28.7	(783)
武 生	男子	6.5	11.6	25.3	19.5	37.2	(277)
	女子	8.4	10.4	22.7	23.7	34.8	(299)
	全体	7.3	10.7	23.9	21.8	36.4	(616)

②遠い将来の目標のために、したいこともしないで生きるよりも、今のしたいことに忠実にいきるべきだ [現在欲求の優先]

		強くそう 思う	どちらかと いえばそう 思う	どちらとも いえない	どちらかと いえばそう 思わない	まったく そうは 思わない	N
名古屋	男子	24.5	28.8	29.3	11.2	6.1	(392)
	女子	24.6	27.0	34.1	10.8	3.5	(370)
	全体	24.6	27.9	31.7	11.0	4.7	(779)
武 生	男子	25.7	26.8	33.3	9.4	4.7	(276)
	女子	30.8	29.4	28.1	8.4	3.3	(299)
	全体	27.6	28.5	30.2	9.8	3.9	(615)

③一生の仕事になるものを、できるだけ早くみつけるべきだ [一生の仕事志向]

		強くそう 思う	どちらかと いえばそう 思う	どちらとも いえない	どちらかと いえばそう 思わない	まったく そうは 思わない	N
名古屋	男子	30.5	33.1	22.1	9.4	4.8	(393)
	女子	19.9	33.7	30.2	12.1	4.0	(371)
	全体	25.2	33.0	26.1	11.1	4.5	(781)
武 生	男子	33.5	31.7	25.5	5.8	3.6	(278)
	女子	27.5	31.9	28.9	8.4	3.4	(298)
	全体	30.7	32.0	26.6	7.5	3.2	(616)

④ひとつの職業にとらわれるより、その時々により利便な職業についての方がよい [転職志向]

		強くそう 思う	どちらかと いえばそう 思う	どちらとも いえない	どちらかと いえばそう 思わない	まったく そうは 思わない	N
名古屋	男子	7.8	15.2	29.9	23.8	23.3	(395)
	女子	5.1	11.4	41.6	25.7	16.2	(370)
	全体	6.4	13.6	35.5	24.6	20.0	(781)
武 生	男子	12.6	14.4	31.3	20.9	20.9	(278)
	女子	6.0	15.7	32.4	23.4	22.4	(299)
	全体	9.1	14.9	31.0	23.1	21.9	(616)

⑤職業は、お金をかせぐだけのものとしてわりきり、職業以外の生活に自分のいきがいをみつけない  
[手段的職業観]

		強くそう 思う	どちらかと いえばそう 思う	どちらとも いえない	どちらかと いえばそう 思わない	まったく そうは 思わない	N
名古屋	男子	18.2	19.7	30.9	17.0	14.2	(395)
	女子	13.3	21.4	28.7	22.0	14.6	(369)
	全体	16.1	20.5	29.7	19.6	14.1	(781)
武 生	男子	22.7	20.1	32.0	15.5	9.7	(278)
	女子	15.0	22.3	29.0	22.0	11.7	(300)
	全体	18.6	21.9	29.7	18.5	11.3	(617)



「職業忌避感」が弱く、「一生の仕事志向」が強い。

以上の結果をどのように解釈できるだろうか。武生の中学生の方が、名古屋の中学生よりも将来の職業を具体的にイメージできる者が多いことは、地方の中学生の方が都市部の中学生よりも自分の将来を明確に見据えているということだろうか。前述した工藤（2003）では、名古屋の中学生は認識としての「いま」の成績分化は小さいが、希望としての「これから」のライフコースは分化しており、武生の中学生は認識としての「いま」の成績分化はあるが、希望としての「これから」のライフコースはあまり分化しない、ととらえている。このことと合わせて考えると、この解釈はあたらない。そうではなく、名古屋の中学生の方が、武生の中学生よりも将来の職業を具体的にイメージできない者が多いことは、名古屋の中学生の方が現時点で将来を明確に定める必要がないことを示しているのではないだろうか。すなわち、将来の可能性が開かれているからこそ、すなわち「これから」のライフコースが分化しているからこそ、中学生の時点でつすべき職業をはっきりと決めなくてもよいのである。

将来つきたい職業を明確に答えた者の中では、武生よりも名古屋の方が職業名の多様性に富んでいることを確認した。また、武生の子で顕著であるが、中学生にとってイメージしやすい「保育士」と「美容師」の2職種で職業名を答えた者の3分の1を占めている。これらのことは、確かに武生の方が将来つきたい職業を明確に答えた者が多いものの、その視野にある職業の種類は限られていることを示している。「職業観・進路観」についても、武生の方が「一生の仕事になるものを、できるだけ早くみつけるべきだ」と考える者が多い。武生の方が職業への一体化をより強く意識しているのである。また、「できることなら、いつまでも生徒・学生生活をつづけて、職業などはもちたくない」と考える者が武生よりも名古屋の方に多いことは、一見すると先送り志向を表しているようにも見えるが、そうではなく、名古屋では中学生である「いま」、職業のことを考えなくてもすむということなのである。これらの事実は、工藤（2003）が述べる、武生に比べて名古屋の中学生の「これから」のライフコースは、より分化しているということと一致すると考えられる。

#### 4. ジェンダー意識とライフコース展望

本節では、ジェンダーにかかわる意識項目の結果をみていく。ジェンダー意識項目は、性別役割分業意識、女性の不利に関する意識からなっている（表6）。

a～fは性別役割分業規範に関する項目である。このなかで、一般に広く用いられている項目は「男は外、女は家庭」という、仕事・家庭二領域への男女振り分けをあらわす項目(a)である。この項目については、肯定する人の割合が「どちらかといえば」をあわせても、名古屋女子で17.3%，男子で36.0%，武生女子で15.7%，男子で28.9%である。この典型的な役割分業規範に対しては、否定的な意識をもつ中学生のほうが多数派なのである。そのほかに「専業主婦の意義」(b)、「女性の職業」(c)、「男性の家事・育児」(e)、「女性の稼得」(f)の項目でも、近代的性分業に反対する回答をする人のほうが多い。6項目の中で、唯一賛否が拮抗している項目は「家事・育児は女性の第一責任」(d)である。仕事・家庭二領域に対する役割の性別振り分けを否定し、二領域への男女相互乗り入れを受け入れる意識をもつ人が全体に多いが、女性は家内領域を優先するべきという考えは、各地域・男女とも、ほぼ半数の人が賛成しており、領域の優先性という形の近代的性分業規範は、相対化される程度が弱いことがみてとれる。

表7. 「男は仕事、女は家庭」に関する意識

(1980年中野区中学3年データ)

	もっとも だと思ふ	どちらとも いえない	そうは 思わない	(%)
男子	54.6	22.2	23.2	(194)
女子	31.9	30.4	37.7	(191)

名古屋における二領域への性別振り分けに関する規範への回答を、本調査項目とほぼ同じ項目からなる「中野区中学生データ」(1980年代初頭)と対照させてみると興味深い(表7)。中野区調査の「男は仕事、女は家庭」という項目に対する回答をみると、この考え方を「もっともだと思ふ」人の割合は、女子31.9%、男子54.6%、「どちらともいえない」が、女子30.4%、男子22.2%、「そうは思わない」人の割合は女子37.7%、男子23.2%である。「中野区」では、男子の半数以上が、女子でも3割強の人が、領域への性別振り分けを肯定していたのである。単純な比較は慎まねばならないが、「中野区」と並べてみると、2001年名古屋にみる「性別役割分業」否定率の高さは、際立っている。今日の中学生にとって「性別役割分業反対」のほうが、むしろ規範性をもつようになってきているあらわれと読むことができるかもしれない。

両地域の男女差をみると、多くの項目で「女子のほうが近代的性分業反対」という方向の違いがみられる。名古屋、武生ともに性差がみられたのは「男は外、女は家庭」(a)、「女性の職業」(c)、「男性の家事・育児」(e)、「女性の稼得」(f)の4項目である。唯一「女子のほうが、性別役割規範が強い」方向の関連性がみられたのは、名古屋の「女性はまず家事・育児」(d)の項目である。

地域に注目すると、「男性の家事・育児」(e)では男女ともに、「女性の職業」(c)、「女性の稼得」(f)では特に男子において違いがみられ、武生のほうが近代的性分業を否定する傾向がみられる。

つづいて、女性の不利に関する意識について見ていく。現実の生活での「女性の不利」についての項目が(g)、(h)である。「学校では女子は男子より不利」だと思ふ人の割合は、名古屋女子42.0%、男子25.7%、武生女子43.3%、男子39.3%である。「社会にでると女性は男性よりも不利なことが多い」と思ふ人の割合はさらに多く、名古屋女子では80.7%、男子で60.8%、武生女子で86.3%、男子で69.3%である。規範的な次元では、性別役割分業反対は「正解」になりつつあるが、現実の社会における女性の処遇に対しては、中学生たちは厳しい認識をもっている。

二項目とも、両地域ともに男女の違いがみられ、いずれも女子のほうが厳しい認識をもっている。地域の違いは、特に男子においてみられる。いずれの項目でも、武生の男子のほうが名古屋の男子よりも「女性の不利」について、より厳しい認識をもっている。

このようなジェンダー意識を持つ中学生たちは、自分の人生展望の中で、仕事と家庭生活の関連をどのように位置づけているのだろうか。自分と配偶者それぞれのライフコース展望に対する回答をみよう。

#### ・自分のライフコース

「あなたは結婚した場合、仕事を続けるつもりですか」という問いに対する回答結果を示したものが表8である。各地域とも、男女で著しく回答が異なる点に、まず注目される。男子は「結婚してもずっと仕事を続けるつもり」という継続就労志向の人が、名古屋82.9%、武生88.9%と圧倒的に多いが、継続就労志向の女子は名古屋で29.7%、武生で52.7%と、特に名古屋で著しく低くなる。それに代わって「出産退職・再就職」志向の女子が、名古屋30.5%、武生24.3%と、高率を示している。先にみたように、規範レベルでは性別役割分業を否定する意識が強くなって

表6. ジェンダー意識

(%)

a 男性は外ではたらき、女性は家庭を守るべきである		そう 思う	どちらかと いえばそう 思う	どちらかと いえばそう 思わない	そう思は ない	不明	N
名古屋 ***	男子	10.1	25.9	29.7	32.2	2.0	(397)
	女子	3.5	13.8	33.4	46.3	2.9	(374)
武 生 ***	男子	7.1	21.8	33.6	37.1	0.4	(280)
	女子	1.7	14.0	37.0	47.0	0.3	(300)
b 専業主婦というしごとは、社会的にたいへん意義のあることだ		そう 思う	どちらかと いえばそう 思う	どちらかと いえばそう 思わない	そう思は ない	不明	N
名古屋	男子	11.8	38.0	33.5	14.6	2.0	(397)
	女子	12.6	32.9	37.4	14.2	2.9	(374)
武 生 *	男子	11.8	35.0	38.2	15.0	0.0	(280)
	女子	10.3	25.3	40.7	23.3	0.3	(300)
c 女性も、じぶん自身の職業生活をたいせつにした生き方をするべきだ		そう 思う	どちらかと いえばそう 思う	どちらかと いえばそう 思わない	そう思は ない	不明	N
名古屋 ***	男子	32.7	44.6	15.4	5.3	2.0	(397)
	女子	52.4	36.9	5.9	1.3	3.2	(374)
武 生 ***	男子	42.9	43.6	8.9	4.6	0.0	(280)
	女子	60.0	32.7	5.0	2.0	0.3	(300)
d 女性は職業をもっている、まず家事・育児の責任をはたすべきだ		そう 思う	どちらかと いえばそう 思う	どちらかと いえばそう 思わない	そう思は ない	不明	N
名古屋 **	男子	12.8	33.5	34.8	16.4	2.5	(397)
	女子	20.9	36.1	26.5	12.6	4.0	(374)
武 生	男子	14.3	35.0	34.3	15.7	0.7	(280)
	女子	16.3	37.7	31.0	14.7	0.3	(300)
e 男性も、女性と対等に家事や育児をするべきだ		そう 思う	どちらかと いえばそう 思う	どちらかと いえばそう 思わない	そう思は ない	不明	N
名古屋 ***	男子	41.1	39.3	13.1	4.5	2.0	(397)
	女子	60.2	29.1	6.4	1.1	3.2	(374)
武 生 ***	男子	52.5	30.7	13.9	2.9	0.0	(280)
	女子	72.7	21.0	4.0	1.7	0.3	(300)
f これからは女性も、お金をかせぐ責任を男性と対等に分担すべきだ		そう 思う	どちらかと いえばそう 思う	どちらかと いえばそう 思わない	そう思は ない	不明	N
名古屋 ***	男子	21.2	40.8	28.5	7.1	2.5	(397)
	女子	38.0	38.0	17.9	1.6	4.5	(374)
武 生 ***	男子	30.0	43.2	21.8	4.3	0.7	(280)
	女子	47.7	34.7	14.0	3.0	0.7	(300)

注) アスタリスクは「不明」を除いて行った各地域男女別 $\chi^2$ 乗検定で有意な関連が見られたことを示す。\*\*\* $p<.001$  \*\* $p<.01$  \* $p<.05$

いるが、特に名古屋において、自分のライフコースとしては親世代の典型的な働きかたである「中断再就職」を展望する女子が多いのである。地域でみると女子回答に違いがみられ、武生のほうが継続就労型を志向する人が多い。これは、この地域における女性就労率の高さの反映であろう。

「結婚するつもりなし」との回答する人が名古屋女子で8.0%、男子で7.1%、武生女子で5.7%、男子も5.7%と、無視できない割合で存在することにも注目される。両地域ともに、親世代のライフコースを踏襲して生きようとする人が多い一方で、「確信犯シングル」志向の人も、一定の割合で存在しているということである。

#### ・配偶者のライフコース

「あなたが結婚した場合、結婚相手がはたらくことをどう思いますか」という問いに対する回答を表9に示した。「自分のライフコース展望」を示した表8と同様、ここにも著しい性差がみられる。その方向は、「自分のライフコース展望」と同様であり、女子は未来の夫に対して圧倒的に継続就労を望む一方（名古屋女子79.4%、武生女子87.3%）、男子は妻に対して継続就労を望む割合は低く（名古屋男子27.5%、武生男子37.9%）、家族形成に伴って職業生活を調整する生きかたを妻に望む中学生が、名古屋、武生ともに約半数を占めている。

ここでは表8と逆に、男子回答に地域差がみられ、妻の継続就労を望む傾向は、武生の男子のほうが強い。ただし、その割合は37.9%と、武生女子の5割強が継続就労を志向しているのと比較すると、低めの回答率である。

これまで読み取ってきた各地域男女別分析結果をまとめてみる。地域差については、ジェンダー項目の次元によって地域差の表れに違いがあるという、興味深い結果が得られた。性別役割分業意識やライフコース展望など仕事と家庭の領域分離に関する項目では、女性就労率が高い武生のほうが領域分離に反対する傾向にあった。他方、本稿では示さなかったが、なりたい人間像や

表8. ライフコース展望 (%)

		継続就労	結婚退職	出産退職 ・再就職	出産退職 つもりなし	結婚する	その他	不明	N
名古屋 ***	男子	82.9	0.3	0.8	1.5	7.1	0.5	7.1	(397)
	女子	29.7	9.4	13.9	30.5	8.0	1.6	7.0	(374)
武 生 ***	男子	88.9	1.4	1.4	1.4	5.7	0.7	0.4	(280)
	女子	52.7	4.3	9.0	24.3	5.7	3.3	0.7	(300)

注) アスタリスクは「不明」を除いて行った各地域男女別 $\chi^2$ 乗検定で有意な関連が見られたことを示す。\*\*\* $p<.001$  \*\* $p<.01$  \* $p<.05$

表9. 配偶者のライフコースに対する意向 (%)

		継続就労	結婚退職	出産退職 ・再就職	出産退職 つもりなし	結婚する	その他	不明	N
名古屋 ***	男子	27.5	12.1	18.1	20.7	6.0	8.3	7.3	(397)
	女子	79.4	0.3	0.8	4.0	7.0	1.1	7.5	(374)
武 生 ***	男子	37.9	7.9	14.6	28.9	5.0	5.0	0.7	(280)
	女子	87.3	0.7	1.3	3.0	5.7	1.0	1.0	(300)

注) アスタリスクは「不明」を除いて行った各地域男女別 $\chi^2$ 乗検定で有意な関連が見られたことを示す。\*\*\* $p<.001$  \*\* $p<.01$  \* $p<.05$

学歴性差意識（女子のみ）など、男／女らしさや性差意識にかかわる項目では、名古屋のほうが従来の性のステロタイプを超える傾向が強いという結果が得られている（山根2003）。

ふたつの地域にみられるジェンダーのありようの違いの、この「ねじれ現象」は、今後の考察をすすめる上で示唆的である。この現象を、ここで簡単に、現時点の日本におけるジェンダー状況との関連で考えてみたい。その際、アングルを中範囲に設定し、中学生の生活世界を構成している地域とのかかわりでみたとき、家族、学校、メディア・消費などの各領域において、「近代的ジェンダー配置」からのズレがそれぞれの地域で存在し、その組み合わせによって異なる「ジェンダーの磁場」が構成され、そこで生活する中学生の意識と行動に影響をあたえる、という見方ができるのではないだろうか。例えば名古屋では家族・労働領域における親たちの現実の性分業のありかたよりもメディア・消費世界にひっぱられるアイデンティティレベルでのジェンダー平等化が相対的に強く進行し、武生では現実の家族・労働領域における「共働きが普通」という生活実態にひっぱられて、「男は仕事・女は家事」という近代的ジェンダー配置を相対化する意識が強い、というように。

## 5. むすびにかえて

ここまで、クロス集計表を使って都市と地方の中学生の比較をしてきた。それはきわめて単純な作業であるが、両地域における多くの差異を見いだすことができた。ここであらためて、3節、4節で得られた知見のうち、おもなものを以下に示すことにする。

- ・名古屋の中学生は、つきたい仕事は明確ではない者が多いが、明確な者の中ではつきたい職業の多様性が認められる。また、職業観については、相対的に「職業忌避感」が強く、「一生の仕事志向」が弱い。一方、武生の中学生は、名古屋と比べるとつきたい仕事は明確である者が多いが、明確な者の中ではつきたい職業の多様性が名古屋ほどはみられない。また、職業観については、相対的に「職業忌避感」が弱く、「一生の仕事志向」が強い。
- ・とくに女子において、名古屋では、自分のライフコースとしては親世代の典型的な働きかたである「中断再就職」を展望することが多いが、武生では、地域における女性就労率の高さの反映してか、「継続就労型」を志向する人が多い。
- ・とくに男子においては、武生では妻の継続就労を望むことが強い。ただし、その割合は37.9%と、武生女子の5割強が継続就労を志向しているのと比較すると、低めの回答率である。

これらからは、両地域の中学生の思い描くライフコースは異なることが理解できるが、同時に、かれらのこれから歩むライフコースも異なってくるであろうと予測することもできる。そしてその違いは、都市と地方の地域性の違いによると考えられるのである。

地域性の中での中学生の姿を見ようとして、本稿では、「職業意識」「ジェンダー意識」という生徒の意識に焦点をあわせてきた。もちろん、意識を見ることですべてがわかるわけではない。最近、生徒に関することとして話題になることが多い、「公立ばなれ」「階層格差」「フリーター志向」等は、ある意味、地域性の構造にかかわるものである。それら構造的視点からの知見と、本稿での意識における知見を重ね、今後は、その両面から「地域（性）と生徒」の関係を探っていきたい。

付記 本稿では、3節を阿形健司、4節を山根真理、それ以外を工藤保則が執筆している。

注

- 1) 調査項目は高校問題研究会（代表・尾嶋史章同志社大学教授）が行った「高校生の進路と生活に関する調査」（1997年実施）の項目を下敷きにし、それに新たなものをくわえる形で作成した。「高校生の進路と生活に関する調査」については、尾嶋編著（2001）にまとめられている。
- 2) 自由記述をコーディングする方針として、具体的な職業名を明記していなくても、記述内容から職業名を特定できるものはできるだけ取りあげた。複数の職業名をあげている場合は最初にあげられたものを採用した。
- 3) ただし、「全体」には性別不明者を含んでいるので、「全体」の人数は「男子」と「女子」の合計人数とは必ずしも一致しない。以下の表でも同様である。
- 4) 中学生の結果について「イメージできない」比率が小さい順に並べると、「警察官」5.6%、「幼稚園教員」5.9%、「美容師」6.4%、「小学校教員」6.8%、「中学校教員」7.0%、「俳優」7.1%、「医師」7.2%、「看護婦・看護師」8.1%、「高等学校教員」9.9%、「保育士」10.1%、「建築大工」13.2%、「イラストレーター」16.6%、「自動車整備工」17.0%、「プログラマー」32.0%などである。
- 5) これらの項目は、清水和秋の作成した中学生対象の「職業モラトリウム尺度」の下位項目である（吉田2001:351-358）。

参考文献

- 尾嶋史章編著、『現代高校生の計量社会学—進路・生活・世代』ミネルヴァ書房，2001
- 1995年SSM調査研究会、『SSM産業分類・職業分類（95年版）』，1995
- 総務庁統計局、『社会生活統計指標2002』，2002
- 吉川徹、『学歴社会のローカル・トラッカー—地方からの大学進学』世界思想社，2001
- 工藤保則，「中学生のライフコース・イメージ—都市と地方の比較・計量分析」『大学における人と組織のネットワーク』甲南大学総合研究所叢書72，2003
- 東京都中野区児童青少年部婦人問題担当，『小・中学生の性別役割分業に関する意識と実態』，1981
- 東京都中野区児童青少年部婦人問題担当，『高校生の性別役割分業に関する意識と実態』，1982
- 轟亮，「職業観と学校生活感—若者の『まじめ』は崩壊したか—」尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学—進路・生活・世代』ミネルヴァ書房，2001
- 日本労働研究機構，『中学生・高校生の職業認知』（資料シリーズNo.112），2001
- 山根真理，「中学生のジェンダー経験と意識」工藤保則編『中学生の進路と生活』（科学研究費研究成果報告書），2003
- 吉田富二雄編，『心理測定尺度集Ⅱ—人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉』サイエンス社，2001